

## 地域情報（県別）

### 【群馬】女性医師は「働き方を変えても、続けることが大事」-菊地麻美・群馬大学医学部附属病院臨床研修センター副センター長に聞く◆Vol.2

医師を志したきっかけは祖父の「誤診」

m3.com地域版

群馬大学医学部附属病院（前橋市）臨床研修センターの菊地麻美副センター長が2024年7月、同年に群馬県女医会が創設した群馬県女医会賞の第1回地域貢献賞を受賞した。同賞は医学研究奨励賞と地域貢献賞からなり、地域貢献賞は地域医療において社会や医療などに貢献した女性医師に贈られる。菊地氏に、女性医師への提言や今後の目標などを聞いた。（2024年8月7日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

——菊地先生が医師を志したきっかけは何だったのですか。

私が幼稚園の頃、祖父がある総合病院で誤診を受けたことです。祖父は脳腫瘍と診断され、手術をすることになったのですが、それが誤診でした。しばらくして、家庭医の先生が手術の話を目にしたらしく、訪ねて来てくれました。そして、家庭医の先生は「あの病院で脳の手術をして、生きて帰ってきた人はいるが、まともな状態で帰ってきた人はいないよ」と言ったのです。

その結果、家族会議となり、東京の有名な病院でも診てもらうことになりました。今で言うセカンドオピニオンです。東京の病院では、脳梗塞と診断され、手術は不要で、リハビリを行うこととなりました。3～4カ月、入院してリハビリをし、少し麻痺は残りましたが、祖父は元気に退院しました。祖父は、90歳まで生きました。

この経験が衝撃的で、「また家族に何かあったら困る。私が医師になってしっかり診てあげなきゃ」といった気持ちで、医師を目指しました。また、手塚治虫さんの作品『ブラックジャック』が好きで、漫画も全巻持っています。『ブラックジャック』の影響で医師と言えば外科医という印象が強く、私も外科の道に進みました。

臨床の現場では、患者さんから「あの先生に診てもらわんじゃなかった」とだけは思われぬような診療に努めなければならないと心がけています（笑）。



菊地麻美氏

——これまでに女性ならではの苦労はありましたか。また、それらをどう克服しましたか。

私が医師になった頃、外科では女性医師はほとんどいませんでした。現場の看護師も女性外科医師に慣れていませんので、私に対して緊張していたようです。看護師から「どんな人なのかと思って心配していました」などとも言われたこともあります。ですがこれは、周囲の皆さんのご理解やお力添えもあり、今から思えば大した苦勞ではなく、やはり最も大変だったのは、子育てや出産、育児ですね。私自身はどう解決すべきなのか分からず、試行錯誤でしたが、最近の後輩たちはみんなとても優秀で、上手に子育ても乗り切って活躍していると感じています。

## ■ 出産を機に働き方を変えても、辞めた女性医師はいない

——菊地先生の周りに、出産を機に医師を辞めてしまった女性はいますか。

私の知るかぎり、辞めてしまった女性医師はいません。ただ、働き方を変える女性医師はいます。私たち外科医は、手術がありますので、ほぼ病院に勤務医として戻りますが、他の領域では出産を機に開業する女性医師もいます。または、パート勤務になる女性医師もいます。彼女たちは、長時間の拘束のない働き方を選び、医師を続けています。どんな働き方であったとしても、自分の得意分野で活躍することが大切だと思います。

つまり、開業医と勤務医でどちらが良いかというような問題ではなく、非常勤よりも常勤が良いと決めつけるのも間違いです。一人ひとりにはそれぞれの生き方があり、誰もがそれぞれの場で頑張っているのです。大切なのは、働き方の形ではなく、仕事を続けていることではないかと個人的には考えています。

——女性医師がより活躍できるようなるためには、何が必要でしょうか。

性別に関係なく、医師全体が仕事と人生を両立できる環境が必要だと感じています。医師の働き方改革などもあり、表面上はその方向に進んでいくとは思いますが、ですが、女性たちにとっては、結婚や出産、子育てなどが、人生の大きな分岐点となることに変わりはありません。

女性医師が仕事と人生を両立させるために大切なことは、自分の強みを生かせる場を見つけることだと思います。女性医師には、出産など女性ならではの人生経験があります。それも自分の長所ととらえ、社会に対して自らの長所を生かし、活躍できれば良いと思います。それに、医師が安心して働き続けられれば、医師不足の解消にもつながるはずです。

——今後の目標を教えてください。

若い女性医師と先輩女性医師の双方をつなぐ場を設けたいと思っています。群馬県女医会にはそうそうたるパイオニアの先生たちがいますし、私も女医会に参加することで、いろいろな分野の諸先輩と知り合うことができました。大学病院の外科医だった私が、大学以外、外科以外の世界を知るきっかけにもなりました。ですので、広い視野から自身のキャリアを考えるためにも、若い女性医師たちに向けて、このような交流の機会を設けられたらうれしいです。女医会にはさまざまな年齢層の医師がいますし、開業医も勤務医もいます。ロールモデルとなる先輩と出会えるかもしれません。また、相談できる仲間にも出会えるかもしれません。

出産や子育てに関しても、女医会で若い女性医師たちが子育ての苦勞などを訴えると、先輩方からは「昔も今も、苦勞することは一緒なのね」との言葉が返ってきます。私もそうでしたが、そう言われると、「先輩たちはこの苦勞を立派に乗り越えたのか」と勇気づけられます。

最近の社会的な意識では、「男性」「女性」と区別しすぎるのは良くないのかもしれませんが、ですが、周囲が女性を見る目と男性を見る目はまだ違っているという現実があると思います。今でも女性は結婚すれば、妻として周りから見られ、妻としての役割を求められます。出産すれば、母として見られ、母としての役割を求められます。もちろん男性も、夫や父として見られるでしょうが、負わされる役割の重さと労力は、女性の方がずっと大きいでしょう。少しずつ社会も変わっていくと思いますが、いまだに女性に苦勞が多いのは現実です。これからの若い医師たちがこうした現実を乗り越えていくために、女医会の先人、先輩方の知恵は必ずお役に立つと考えますので、ぜひ交流の機会を設けていきたいと思っています。

1995年、群馬大学医学部を卒業。同大医学部附属病院第二外科、高崎総合医療センター、公立碓氷病院、公立富岡総合病院、前橋協立病院、同大医学部附属病院乳腺内分泌グループなどを経て、2009年に同病院臨床研修センターへ着任。現在は、同センター副センター長、同病院地域医療研究・教育センター講師。臨床では乳腺内分泌外科を担当。医学博士。医学教育専門家。

【取材・文・撮影＝武井克真】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

